広島国際大学心理科学部紀要　第２巻 第１号　39 頁～44 頁　2014

直観の形式はなぜ純粋直観なのか

広島国際大学心理科学部臨床心理学科　甲田　純生

1　直観の形式が純粋直観であることの奇妙さ

カントは『純粋理性批判』の超越論的感性論において、空間と時間に関する学を提示した。それは、超越論的哲学の立場から、空間と時間を感性のア・プリオリな原理として示すものであった。それによれば、空間と時間は感性的直観一般の純粋形式である。

我々が対象を認識するためには、我々が対象と関係しなければならない。言いかえれば我々の認識能力が対象を、まずは受容しなければならない。この受容の能力が感性である。対象を受容するとき、その対象が我々の感性を触発する。その結果生じるのが感覚である。この感覚は、何らかの形で秩序づけられなければならない。カントは次のように言う。

> 現象の多様なものがなんらかの諸関係において秩序づけられることを可能にするものを、現象の形式と呼ぶ（A20,B34）[1]。

「現象の多様なもの」＝「感覚」を秩序づけるものは感覚ではありえないから、感覚から切り離して考察できなければならない。それが感性の「形式」、直観の形式であり、すなわち空間と時間なのである。

ところが、カントは次のようにも言う。

> 感性のこの純粋形式は、それ自身、純粋直観とも呼ばれる（A20,B34f）。

カントによるこの発言を文字通りに受け取るなら、空間と時間は直観の純粋形式であると同時に純粋直観である、ということになる。しかも、なぜ直観の純粋形式が純粋直観でもあるのかということについて、カントは何の説明も与えていない。

しかし、「形式」の一般的定義を考えれば、〈あるもの〉の形式が〈あるもの〉と同じであるということは、論理的にあり得ない。例えば、論文の形式　―　フォントや行数、文字数といった書式　―　と論文そのものとが同じであるなどということはない。それゆえ、ふつうに考えれば、直観の純粋形式は純粋直観であるはずがない。

そこで本論稿では、なぜ直観の形式が純粋直観であるのかを、『純粋理性批判』における超越論的感性論の記述を追いながら検討する。その際、直観の形式である空間と時間のうち、前者だけを扱う。なぜなら、本来「直観」の名に値するものは空間だけだからである[2]。時間は、空間とのアナロジーにおいてのみ「直観」と呼ばれるにすぎない。それゆえ、「なぜ直観の形式が純粋直観であるのか」という問いも、空間に対してしか妥当しないのである。

以下ではまず、従来のカント解釈から代表的な解釈を二つ選び、それらの解釈によっては、直観

の形式を純粋直観としてとらえることが難しいことを示す。それは要するに、それらの解釈が間違っていることを意味する。その上で、直観の形式を純粋直観と解するためには、カントの言う「空間」をどのようなものであると考えなければならないのかを示すことにする。

2 「直観の形式＝色メガネ」説

カントの認識論について語るとき、しばしば引き合いに出されるのが、「色メガネ」説である。カント以前の認識論では、認識が対象に従うと考えられてきた。それに対してカントは、対象が認識に従うと考え、認識における「コペルニクス的転回」を成し遂げた。

対象が認識に従うというのは、対象が主観における認識の形式に従うということである。とはいえ、「認識の形式」というのはわかりにくい。そこでこの「形式」が「色メガネ」にたとえられることになる。それが「色メガネ」説である。感性の形式（直観の形式）に話を限って言えば、我々が対象を受容するのは、色メガネをかけて対象を見るようなものである、ということである。我々は「感性の形式」という色メガネを通してしか対象を見ること（＝認識すること）ができない。それゆえ、感性の形式は、対象を受容する際の感性の制約なのである。

もしこの図式が正しいのであれば、「色メガネ」と「対象を見ること」とは別物であることになる。カントの用語を使えば、「直観の形式」と「直観」とは別物である、ということである。したがって、直観の形式が同時に純粋直観である、などということはありえない。

それゆえ、カントの言うように直観の形式が純粋直観であるのならば、直観の形式を「色メガネ」のたとえを使って説明すること自体が間違っている、ということになる。

3 「巨大な容器」説

空間を直観の形式とみなすカントの理論に対するもう一つの典型的な解釈は、空間を「巨大な容器」(3) とみなす考え方である。この解釈が依拠するのは、超越論的感性論における次の箇所である。

> <u>空間中にいかなる対象も見いだされない</u>という状態を考えることはきっとできるだろうが、空間が存在しない状態を想像することは決してできない（A24,B38f、傍線筆者）。

カントが書いたこの文だけを見れば、「すべての対象を消去してもまだなお残存するものが空間である」とカントが言っているように見える。むしろ、この文だけに限って言えば、そう読むのが最も自然であろう。だとすれば、すべての対象が消去されたのちに残る、何もない空虚な空間こそがカントの言う「空間」である、ということになる。それはたとえて言えば、対象を入れる容器のようなもので、畢竟、空間とは「巨大な容器」のようなものである、ということになる。

だが、超越論的感性論全体を読めば、先の引用文と同じことを意味しているであろうと考えられる一文が、先の引用箇所よりも前の部分にあることに気づく。それは次のようなものである。

純粋直観はア・プリオリに、すなわち 感官や感覚の現実的対象がなくても 、感性の単なる形式として、心の中に生じる（A21,B35、傍線筆者）。

先の引用はこの引用と合わせて読まれるべきものであろう。この引用文では、カントは「感官や感覚の現実的対象がなくても」と書いている。純粋直観というのはもちろん、カントにおいては空間のことであるから、この引用文は「空間は、感官や感覚の現実的対象がなくても生じる」と読むことができる。先の引用文中の「空間中にいかなる対象も見いだされないという状態を考えることはきっとできる」という部分は、これと同内容のものであろう。

おそらくカントは、先の引用文では「感官や感覚の現実的対象」と書くべきところを、すでにそう書いたことを念頭に置きつつ、単に「対象」で済ませてしまったのではないだろうか。だとすれば、「空間中にいかなる対象も見いだされないという状態を考えることはきっとできる」という一文は、「空間中にいかなる〈感官や感覚の現実的対象〉も見いだされないという状態を考えることはきっとできる」という意味に読まねばならない。そうであるならば、この一文の意味を厳密に解するためには、「感官」もしくは「感覚」という言葉でカントが何を意味しようとしているのかを把握しなければならない。

「感覚」についてカントは次のように定義している。

我々が対象によって触発される限りにおいて、対象が表象能力に及ぼす効果を感覚という（A19,B34）。

しかしこの定義だけでは、「感覚」という言葉でカントが具体的に何をイメージしているのかは全くわからない。そこで、感覚に関する他の記述を拾ってみると、以下のような表現が見つかる。

表象の中で感覚に属するもの、すなわち不可侵入性、硬さ、色など（A20f,B35）
色や音、温かさといった諸感覚…（A28,B44）

これらの表現から、「感覚」という言葉でカントが言わんとするものが、ロックの言う第二性質と同じものであることがわかる。かくして我々は、先の二つの引用文を次のように翻案することができる。

① 空間中にいかなる対象も見いだされないという状態を考えることはきっとできる。
　⇒　空間中の対象からすべての第二性質を除去した状態を考えることはできる。
② 純粋直観はア・プリオリに、すなわち感官や感覚の現実的対象がなくても、感性の単なる形式として、心のうちに生じる
　⇒空間は、対象における第二性質を除去しても、感性の形式として残る。

以上のような解釈にもとづけば、②においてカントが「対象」という言葉に「現実的」という形容を付加している理由を理解することができる。対象から第二性質を除去してしまっても、対象が対象でなくなるわけではない。だがそのような対象は、我々にとっては「リアル」な対象ではない。我々にとって「リアル」なのは、単に大きさや形をもつだけでなく、色や硬さ、匂いをもった対象である。それゆえ、第二性質を備えた「感官や感覚の対象」は「現実的対象」と言われるのである。

また、二つの引用文を上記のように翻案するという我々の解釈が正しいのであれば、カントの言う空間を「巨大な容器」「空虚な空間」として解釈する説は、その論拠を失うことになる。カントが「空間」というとき、何もない空虚な空間をイメージしているわけではないのである。

4　空間についての形而上学的究明

カントの空間に関する二つの通説を退けたいま、我々はカントの言う「空間」がいかなるものであるかを究明しなければならない。それが明らかになったとき、なぜカントにおいては直観の形式が同時に純粋直観たりえるのかも明白となるであろう。そのためには、超越論的感性論の中の空間に関する記述をピックアップしていく必要がある。まずは空間に関する形而上学的究明を見てみよう。

空間に関する形而上学的究明と題してカントが述べていることは四点ある。要約すると、

(1) 空間は経験的概念ではなく、むしろ経験を可能にするものである。

(2) 空間はア・プリオリな必然的表象であり、外的直観の根底に存するものであるから、現象に依存するものではなく、現象を可能とする条件である。

(3) 空間は唯一無二のものであって、それゆえ一般的概念ではなく純粋直観である。

(4) 空間は無限なものとして表象されるから、概念ではなく、ア・プリオリな直観である。

以上の究明を通して繰り返し言明されているのは、空間が概念ではなく直観であること、そしてそれが経験ひいては現象を可能にする条件である、ということである。これらによって、空間に関するカントの理論的構成は理解できるものの、「空間」という言葉によってカントがどのようなものをイメージしていたのかは皆目わからない。

5　空間についての超越論的究明

次に、超越論的究明についてみてみよう。超越論的究明で言われていることを要約すれば、次のようなことである。

幾何学は空間の諸性質を総合的かつア・プリオリに規定する学である。このような学が成立するためには、空間の表象は直観でなければならない。なぜなら、概念からはア・プリオリで総合的な判断は生じえないからである。しかもその直観は経験的直観ではありえない。もしそうであるなら、そこからはア・プリオリで総合的な判断は生じえないからである。それゆえ、幾何学の命題が必然的で普遍的なものであるためには、空間は純粋直観でなければならない。しかもこの直観は、客観そのものに先立つものであるから、主観のうちに内在する外官一般の形式でしかありえない。

このようにカントは超越論的究明において、幾何学が空間に関するア・プリオリで総合的な判断であることを前提として、そのような判断が空間について成立するためには空間がどのようなものでなければならないかを究明する。しかしやはりこの議論によっても、カントの言う空間が具体的にどのようなものであるかは、不明なままである。

６　純粋直観としての空間

以上、超越論的感性論における空間に関する議論の中核とも言うべき形而上学的究明と超越論的究明の議論を追ったが、それによっては、カントが「空間」という言葉で具体的にどのようなものをイメージしていたのかも、そしてまた「なぜ直観の形式は同時に純粋直観であるのか」も、まったく明らかにされなかった。我々はもはや、直観の形式が純粋直観でもある理由をカントの記述から把握することはできないのであろうか。

超越論的感性論を丹念に読めば、一見議論の本筋ではないと思われるような箇所にヒントが隠されていることに気づく。それらの箇所を箇条書きにしてみよう。

> 表象の中に感覚に属するものが何も見いだされないなら、そのような表象はすべて（超越論的な意味で）純粋と呼ばれる。だとすれば、感性的直観一般の純粋形式が心の中にア・プリオリに見出されるはずで、そこにおいては現象の多様すべてがなんらかの関係において直観される。感性のこの純粋形式は、それ自身、純粋直観とも呼ばれる。そこで、或る物体の表象から次のものを切り離してみよう。物体について悟性が思惟するもの、すなわち実体、力、分割可能性など。それから同様に、物体の表象の中で感覚に属するもの、すなわち不可侵入性、硬さ、色など。そうしても、この経験的直観の中にはまだ残っているものがある。<u>それは延長と形態である。これらは純粋直観に属しており、純粋直観はア・プリオリに、すなわち感官や感覚の現実的対象がなくても、感性の単なる形式として、心の中に生じる</u>（A20f,B34f、傍線筆者）。

> （私たちの心の一性質である）外官を介して、我々は諸対象を我々の外にあるものとして表象する。そしてこれらの対象を総じて空間の中で表象する。空間の中で、<u>諸対象の形態や大きさ、相互関係</u>が規定され、あるいは規定できる（A22,B37、傍線筆者）。

> もし直観が諸関係以外のものを含まないのであれば、直観の形式である（B67）

これらの引用箇所は、カントが「空間」という言葉によって何をイメージしていたのかを如実に示してくれている。空間とは、まず何よりも、「諸対象を我々の外にあるものとして表象する」ことを可能にするものである。視覚を通して得られる諸印象は、さしあたり網膜上に像を結ぶ。それが、生理学的観点から見た「対象の受容」である。それが「我々の外にあるもの」として認識されるためには、対象が上下左右の広がりだけでなく、「奥行き」をもつものとならなければならない。

久保元彦は次のように言う。「…私は、私の外部ということで原初的にはまさしく『私の前』、或

いは『私の前方』を理解しているのではないだろうか。そして何よりもまず、幾人かの哲学者たちによって『奥行き』と名付けられてきた次元と、奥行きの中で認められる『近さ』と『遠さ』、それに奥行きにおいて切り開かれる諸々の『方向』乃至『方位』こそ、私の外部に関するこの原初的な理解内容の等根源的な次元、または構成要素を成しているものである。形式としての空間は第一義的には私の前方であり、形式としての空間の骨幹を形作るものは奥行きなのである」（傍線筆者）（4）。

久保が「奥行き」を空間における第一義的なものと考えていることは慧眼であり正しい。だがそれは、「私の前方」の無限の彼方に向かって「空虚な空間」が開けていることを決して意味しない。奥行き方向への広がりが披けることによって、対象は形態と大きさを獲得する。そしてそれは同時に、諸対象が空間の中での位置関係を得ることを意味する。すなわち、カントにとって「空間」とは、決して空虚な空間を意味するのではなく、私の外部に諸対象が形態と大きさをもって披けていることを意味するのである。

かくして我々は、直観の形式である空間がなぜ純粋直観でもあるのかを理解することができる。以上の議論から明らかなことは、カントにとって空間とは、目の前に見えているものから第二性質を除去したものに他ならないということである。そこには何もないのではなく、対象が大きさや形態としてまだ残存している。したがってそれらを直観することができる。

おそらくカントは、「直観の形式」と言うとき、単に対象を受容する「条件」という意味だけでなく、Form のもとの意味、すなわち「形」という意味をも含ませているのであろう。

カントにおける空間を以上のように解釈したいま、我々はカントの理論が遠くプラトンのイデア論とつながっていることを見出す。プラトンの用語を使って言えば、純粋直観とは対象のイデアを見ることに他ならない。イデアはもともと「観られたもの」すなわち「形」を意味した。「観られるもの」がほかならぬイデア＝形であるからこそ、その場合の「観ること」は「純粋直観」であると同時に「直観の形式」でもあるのである。カントの空間論を解釈しながらイデア論に思いを馳せるとき、我々は直観という語の前に「純粋」という言葉を冠したカントの心情に触れているのかもしれない。

注

(1)『純粋理性批判』からの引用は、慣例に従い第一版を A、第二版を B とし、各引用の最後にその頁数を示す。

(2)「〈直観〉という概念は、本来内的直観としての時間にではなく、外的直観としての空間に適用されるものである」（中島義道『カントの時間構成の理論』S.63、理想社、1987 年）

(3)久保元彦『カント研究』 S.17、創文社、2000 年

(4)久保元彦、前掲書、S.33